

まもなく清六が死亡したためこの刀は、仙田七左工門の手に移ったといわれる。

また一方でこの梶原宗安の太刀はその昔、外坪とほらの服部清五郎という人がもち、しだいに家が貧しくなり、河北の仙田屋へ入ったとも伝わっている。

現在、外坪地内にある墓には梶原宗安之塔・惟時寛保二壬戌歳九月□□と刻んだ石塔がある。

第二節 方言と言い習わし

方 言

人々の生活の中から生まれ、その土地個有の親しみをもつ「方言」は、本町にも多くあるが、これは尾張北部地域共通のもので、「訛り」をもったことばが日常の会話の中で使用されてきた。

しかし今日では経済・文化・教育の発達、拡大により、地域の交流が激しく、人々の生活も大きく変化し、方言はしだいに減少し、おのずと標準語が多く使用されるようになった。

しかしこうしたなかでも、相変らず老人の会話のうちには、昔ながらの方言が多くでる、中でも古来より農耕を中心とした生活の中で生まれ、そして使用されたと思われる方言が多くあるのは当然である。

「さんのようなようさり、たんと白いものが降つたなも」

（昨日の夜、 沢山雪が降りましたねー）

「ふん、ほんだけんど、けさがたはあだにぬくて（と）えなも」

（はい、けれど今朝は割合に暖かいですねー）

以下、町の人々の会話の中から今日語りつがれている方言をもとに、多くの文献と照合しながらおもなものを列記するとつぎのようである。

方 言	標 準 語	方 言	標 準 語
<p>㊦</p> <p>アカン アジナイ アヌク アダニ アツチベタ アラスカ アンビヤ アホラシイ イッチョウウロ イワシタ・イヤアータ イシナ・イシコロ イツセキ イノク・イゴク イキル</p>	<p>駄目だ・いけない 味無い 上を向く 割合いに・ずいぶん あちら側 ……あるものか 具合い・加減 馬鹿らしい 一番上等 言われました 石 一生懸命 動く 蒸し暑い</p>	<p>㊧</p> <p>イレエロキヤアール イボレ ウセル ウザル ウデル エエコカゲン・エエコハチベ エエネル エエ エドクル オル オンギヤア オトラカス オージョウコク オゼエ</p>	<p>色々と 溝 来る 叱る 茹でる 適当・よい程度 背負う 良い・善い 彩色する 居ます 恐しい 落とす 困り果てる 悪い・劣る</p>
<p>㊨</p>			

第2節 方言と言い習わし

方言	標準語
<p>⑦ クラワス</p> <p>⑧ キヤア一モノ キシヨク ギヤフントコク ギヨウサン ギツチヨセイ キブイ・キモイ ギヨウジャ</p> <p>⑨ カマウ カザム カワカス カンス ガンチ キンニヨウ キヤア一モノ キシヨク ギヤフントコク ギヨウサン ギツチヨセイ キブイ・キモイ ギヨウジャ</p> <p>⑩ オチヨゲル オオヒザカク</p>	<p>殴る</p> <p>隅・縁</p> <p>ラツキヨ</p> <p>きつい</p> <p>左利き</p> <p>沢山</p> <p>降参する</p> <p>気持ち</p> <p>買物</p> <p>昨日</p> <p>片目</p> <p>蚊</p> <p>干す</p> <p>ひそみ隠れる</p> <p>いじめる</p> <p>あぐらをかく</p> <p>ふざける</p>
<p>⑪ シヤガム</p> <p>⑫ サカケル</p> <p>⑬ コンキト</p> <p>⑭ ケサメ</p> <p>⑮ ケナリイ</p> <p>⑯ ケツカル</p> <p>⑰ クダレル</p>	<p>屈む</p> <p>粘りが無い・もろい</p> <p>ひっかける</p> <p>度々</p> <p>ごつい・やぼつたい</p> <p>おみえになった</p> <p>来ませんか</p> <p>言つた</p> <p>時々・度々</p> <p>遂に</p> <p>搦つたい</p> <p>こちら側</p> <p>霧雨</p> <p>蹴る</p> <p>羨しい</p> <p>居る</p> <p>下さる・賜わる</p>

方 言	標 準 語
<p>⑤ シトネル ジベタ スコタ スタコク スンデノコト ソウマシイ ソバエル ソソクウ ソウカナモ タワケ ダタクサ ダチャアカン チャント チヨコツト チャット チンチン チヨウガラカス</p>	<p>育てる 地面 頭 くたびれる もう一寸のこと 騒がしい じやれる・たわむれる 繕う・修理する 左様ですか まぬけ 粗末 駄目だ 必ず・きつと 少し 早く・急いで 熱い 欺す</p>
方 言	標 準 語
<p>⑦ ノウナル ネツカラ ネブル ネセル ネキ ヌカス ⑧ ナンデカ ⑨ ナンデエー ドカイ トリエー ドカス ドネキル ドベタ ⑩ テヤアーギヤアー ⑪ ツマシイ ツツカラカス チヨットモ</p>	<p>今だに 倒す 質素な 多分・おおかた 地面 捻じ伏せる 除く 馬鹿な 非常に 何もかも 暖かい 言う 縁・側 倒す 舐る 昔から・以前より 無くなる</p>

第2節 方言と言い習わし

方言	標準語	方言	標準語
<p>㊦ ノグ バンゲ ハヤアー ヒシヤク ヒドレエー ヒヨットスルト ベックラ ベト ヘンベ ヘベエー ホーカル ホオーダ ホオタ ホッコ マンダ マタイ メッソウ</p>	<p>脱ぐ 晩方・夕方 早い 潰す 眩しい もしかすると いやだ 泥 蛇 弱い 投げる その通り 頬 くず 未だに 確実 目分量</p>	<p>㊧ モツサイ ヤロカ ヤカム ヤッチヨル ヤットカメ ヤタクタ ヤグイ ヨコセ ヨウサリ ヨバル ヨウナビ ヨーダツサマ ワヤヤル</p> <p>※</p> <p>……ナモ ……サイガ</p>	<p>貧弱 あげようか 熱くなる ……している 久しぶり むちやくちや 弱い・もろい 下さい 夜 呼ぶ・招く 夜業 雷 いたずらする ……ねえー ……だとすると</p>

方言	標準語	方言	標準語
……ゲナ ……セント ……ダラ	……だそうだ ……しないと ……でしょう	……ギン ……シャアータ ……ゼエモ	……だけ ……された ……ですよ

言い習わし

その土地の人々の生活の中にとけこみ、ときにはそれを左右するほどの大きな威力をもっていたと思われる言い習わしは、その多くが今日では忘れ去られている。

(迷 信)

もっとも科学が進んだ今日の生活の中では、当然のことといえるかもしれないが、面白いことに多くの言い習わしの中には、同一の事象でも地域あるいは人によって肯定したり、否定したりしていることである。

そしてこれらは、物事の前兆を予測するもの、占いめくもの、呪いあるいは禁忌を示すものなど広い範囲におよんでいる。勿論科学的な根拠があつてではなく、長い間の経験あるいは人々の思いつきからのものであろうが、なかにはかなり堅く信じられている言い習わしもある。

ここでは町内に昔から伝わるおもなものを、多くの古老の話の中からひろい集めてみたが、これらは本町のみならず、尾北地方に広く伝わっているものでもある。

分類は、天文、暦、人、生活、病いなどにした。

○天文

日照りの朝ぐもり

○ 曆

日照りがつづくとき地震がゆるする

夕虹が立つとき明日の天気もよい

朝虹が立つとき雨になる

雲が^{のほ}る(西・北へ行く)とき天気は下り坂(悪く)になる

月が^{かさ}をかぶると雨が降る

東の方がこがれる(赤く見える)とき大風になる

雪の多い年は年柄がよい(豊年だ)

地震の前に雉子がなく

日蔭に蜂の巣が多い年は大風が吹く

月夜の蟹は肉がない

雨降りに蜘蛛が下りると天気がよくなる

御嶽山がからりと見えるとき三日以内に雨が降る

来年のことをいうとき鬼が笑う

三りんぼうの日に家を建てると倒れる

寒^{かみ}に雨が多いとき夏大水がでる

旧六月一六日にうどん十六杯食べると夏病みせぬ

○生活

朝、蜘蛛が下がると、その日に客がくる

夜、口笛を吹くと貧乏になる

晩、爪を切ると狂人になる

下駄を投げ、表をむけば晴れ裏をむけば雨

物を失った時、茶釜の手に藁を結びつけておくと出てくる

烏の鳴声が悪いと人が死ぬ

生木に釘をうつと父がなくなる

葬式に同じ道をかえると死人がついてくる

家の棟に「水」という字があると火事にならない

土用丑にうなぎを食べると長生きする

葱を食うと頭がよくなる

茗荷を食うと物忘れをする

茶柱が立つと縁起がよい

書初めを「ドンド焼き」でもやすと字が上手になる

北に流れる川でイボを洗うととれる

尾張富士のおてふきを腹巻にすると寝冷えをしない

○生活

箸で挟みあうのは葬式のまね

飯を一杓子でもると親の死目にあえぬ

家の戸口へ七夕をつけておくと雷が落ちない

財布を秋に買うと中が空になる

茶碗をたたくは乞食のまね

○人

親に似ぬ子は鬼子

額の広い人は運がよい

体に火が入ると善いことがある

耳たぶがかゆい(熱い)とその日によいことが起る

眉毛に長い毛のある人は長生きをする

手の甲の厚い人は金持ちになる

手を胸にあててねると恐しい夢をみる

へそをだしているると雷にとられる

妊婦が火事を見て体をかくと生まれた子供に、赤アザができる

嫁には秋茄子食べさすな

○病
い

う・そ・い・うと地獄の鬼に舌を抜かれる
親不孝をすると指にサ・サ・ク・レがよくだせる

初雪を食べると夏病みしない

目に物貰いができたら、他所の門先で物を貰って食べると治る
へ・そ・の・垢をとると腹痛になる

風邪をひいたら梅干の黒焼をお茶でのめ

やけどにはタ・マ・リをつけよ

頭痛には梅干をこめかみに張れ

輪くぐりをするとう夏病みしない

柿の木から落ちてできたキズは死ぬまで治らぬ